

《新刊紹介》

ジョナサン・ハリス著（井上浩一訳）
『ビザンツ帝国——生存戦略の一千年——』

藤田 風花

本書は、ビザンツ—西欧関係史、とくに十字軍やイタリア・ルネサンス、コンスタンティノープル陥落以後のギリシア人ディアスポラを専門とする、イギリスのジョナサン・ハリスによるビザンツ帝国の概説書である。彼についてはすでに、本書と同じく日本におけるビザンツ帝国史研究の泰斗である井上浩一氏の訳による『ビザンツ帝国の最期』（白水社、2013年）が出版されている。

本書の原題にある「失われた世界」としてのビザンツ帝国は、言語・法律・建築の分野で顕著な遺産を残したローマ帝国との対比のなかで、否定的な評価が与えられがちである。このような評価は、エドワード・ギボンが『ローマ帝国衰亡史』のなかでビザンツ帝国の滅亡をギリシア人の「臆病と内紛」に帰したはるかに前から、しばしばこの帝国にたいして与えられたものであった。しかし「もしその住民が本当に、自分自身を守れないほど、とことん怠惰で無気力だったなら、ビザンツ帝国はなぜあれほど長く存続したのであろうか」（15頁）。ハリスは「なぜ滅亡したか」ではなく「なぜ存続しえたか」を問うことが肝心であるという立場から出発し、約1000年間にわたるビザンツ帝国の生存戦略の歴史を描く。

皇帝と印象的なエピソードを軸に展開されるビザンツ帝国史の通史である本書は、序章・終章を含めた全12章で構成される。内容の紹介に移ろう。

序章で前述の問題意識が提示されたのち、第1章では、ローマ帝国からビザンツ帝国への転換を扱い、コンスタンティヌス治世を、ビザンツ文明に特徴的な要素が出揃った時代として位置づける。キリスト教の光と影にも言及しているが、本書にとってはキリスト教が精神的なものを表現する新たな芸術を発展させたこと、また聖俗分ちがたい存在としての皇帝のあり方が、危険に満ちた不安定な世界において創出された適切な統治形態に資するものであったことが重要である。

第2章は、ユスティニアヌス治世を中心に、東方属州に多数存在する単性論派との論争、および領域拡大にともなう周辺諸勢力への対処について述べる。単性論派とカルケドン派との統一構想の実現が困難をきわめたことは、ユスティヌス2世治世以降を扱った第3章でも触れられている。結局、7世紀中葉にアラブ人により東方属州が征服されたことで帝国はカルケドン派の地域のみとなった（第4章）。

周辺諸勢力への対処の方法は、本書の重要なテーマのうちのひとつである。第5章全体および第6章の一部は、ブルガリア、ロシアといった北方勢力について割かれている。北方世界の征服が「武力によってではなく、忍耐強い外交や、芸術・文学などキリスト教文化の魅力そのものを通じて」（180-1頁）なされたという点は、北方にかぎらず、ビザンツ

帝国が対外戦略において一貫して有していた基本姿勢として、著者が重視するものである。

第7章は、「ブルガリア人殺し」として消極的なイメージで語られることの多いバシレイオス2世について、当時の帝国内外の状況に応じて彼がじっさいにおこなった政策の背景と意義を検討することで、そのような人物像を修正しようとする著者の姿勢が印象的である。また、11世紀前半に傭兵の構成員がロシア人やアルメニア人から西欧人へと変わっていったことに触れ、帝国内での西欧人のプレゼンスの高まりについて述べられている。

つづく第8章から第10章では「内なる敵」、すなわち帝国内で増加していたキリスト教徒の西欧人であるところのラテン人とのかかわりを中心に、ビザンツ帝国の最期の日までが描かれる。この間、領土を大幅に喪失し税収減のため国庫が潤沢でなくなったことは、それまで帝国が諸勢力との交渉のさいに駆使していた豊かさという武器が機能しなくなることを意味したという点で、決定的な意味をもった（第8章）。そして第一回十字軍を契機としてラテン人への不信感が増大していったことを背景に、第四回十字軍以降は、ビザンツ人の自己認識は言語や地域への忠誠にとどまらない偏狭なものとなり、宗教問題が「ギリシア人」としての民族の自己認識と結びつくようになったことが述べられる（第9章）。次第に同盟者であったオスマン朝の脅威が明らかになると、教会分裂を解決することでラテン人の支援を得ようとするが、それも虚しく、コンスタンティノーブルはオスマン軍の手に落ちるにいたった（第10章）。

絶えず国境への圧力に対処する必要が生じていた不安定な世界において、ビザンツ帝国はその生命を約1000年間にわたって保ちつづけることを可能にする「生存戦略」を練りあげていった。それはすなわち、異民族や外敵の征服を、軍事力によってではなく、壮麗さを印象づけビザンツ帝国の価値観に染まらせるべく戦略的におこなわれた外交や、キリスト教文化の魅力の伝達をもって可能にするということである。終章において「他者をなじませ統合する能力」（339頁）として表現され、本書のなかで著者が繰り返し強調するこの点こそが、冒頭に述べた問いへの回答である。

終章で著者は、ビザンツ帝国の「眼に見える」最大の遺産は信仰であると語る。筆者が専門とするキプロス島では、ビザンツ領から離脱し十字軍国家となったのちも、正教徒のあいだに「ビザンツ人（ローマ人）」を自認する人々が存在していたことが知られている。ラテン人と対峙したとき、とくに信仰の問題にかかわる対立が生じたときに、すでにビザンツ領ではなくなっていた地域でそのような主張がなされたことは興味深い。

とはいえ、やはり著者がビザンツ帝国の遺産としてもっとも重視するのは、他者をみずからのなかに引き受け統合する能力にこそ社会の強さがある、という教訓である。この点にかんして本書では、ラテン人を歓迎したビザンツ人が、第四回十字軍ののちラテン人によって樹立された新政権にはそのような能力が欠如していることに気づいた、と述べられている（282頁）。むしろ、ビザンツ帝国を地図上から消したオスマン帝国こそ、このような能力によって特徴づけられるのではないだろうか。この帝国も、ビザンツ帝国には及ばないものの、600年間以上にわたって存続した息の長い国家であったことは、偶然ではな

書評・紹介

いのかもしれない。

ビザンツ帝国史については、本書の訳者である井上氏が上梓されたものを含め、日本語で専門的な情報を得ることのできる書物が多数ある。訳者をして「こんな本を書きたかった」と言わしめた本書の仲間入りによって、そのラインナップはよりいっそう充実することとなった。ぜひ一読をおすすめしたい。

(B5版 355頁+22頁 2018年2月 白水社 税別4200円)
(京都大学大学院博士後期課程／日本学術振興会特別研究員DC)